神奈川県立 生命の星・地球博物館
Kanagawa Prefectural Museum of Natural History

友の会通信

128
2025.06

Vol.29 No.1 通巻128号　2025年6月15日発行(年4回発行)

新年度が始まりました。また、昨年度も友の会への多くのご参加、誠にありがとうございました。
さて、友の会は会員の皆様の「知りたい」「やってみたい」という想いが主役です。
講座へのご参加はもちろん、企画のアイデアや運営のお手伝いなど、様々な形で活動に関わっていただけませんか。
皆様と共に、より魅力的な友の会を創っていきたいと思います。ご参加をお待ちしております。

目　次

ご挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
事務部より・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
活動報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4
情報クリップ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
行事案内・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12

今年度もよろしくお願いします

会長　鈴木智明

今年もまた新たな年度が始まりました。よろしくお願いします。また日頃より友の会活動に対しまして、深いご理解と温かいご支援を賜り、重ねて御礼申し上げます。

さて、昨年度も観察会や講演会など、会員の皆様と博物館のご協力のもと、意義ある活動を行うことができました。この点につきましては、皆様に深く感謝申し上げます。

しかしながら、同時に、私たち友の会が今後さらに発展していくためには、目を向けるべき課題もいくつかございます。具体的には、ここ数年、**友の会主催の講座内容がややマンネリ化し、新たな展開を生み出せていないのではないか**、という点。また、**会員数が伸び悩んでおり、新しい仲間を迎え、会の活力を維持していくための工夫が求められている**こと。そして、これは多くの組織が抱える問題でもありますが、**役員のなり手がなかなか見つからず、運営を担うメンバーが固定化しがちになっている**という現実です。

これらの課題は、友の会の活動の質、そして持続可能性に直結する、大変重要な問題であると認識しております。

この素晴らしい生命の星・地球博物館を応援し、自然科学の魅力を共有するという私たちの目的を未来へ繋いでいくためには、これらの課題に真摯に向き合い、皆様と共に解決策を探っていく必要がございます。

今年度は今挙げたような課題について、会員の皆様と現状認識を共有し、友の会の未来のために何ができるか、共に考える絶好の機会でもあります。

どうすれば講座がより魅力的になるか、どうすれば新しい会員を惹きつけられるか、そして、どうすればより多くの方が無理なく運営に関われるか。皆様からの忌憚のないご意見や、新しいアイデアをぜひお聞かせいただきたいと願っております。

今後の建設的な議論を通じて、課題解決への一歩を踏み出せることを期待いたします。会員の皆様のご協力をぜひお願いします。

博物館は開館 30 周年を迎えました

館長　田中徳久

一昨年（2023 年）6 月に館長に就任し、2 年が経過しました。私が館長に就任する前年まで、新型コロナウィルスが猛威を奮っており、館長就任直前の 5 月、ようやく新型コロナウィルスの感染症法上の位置づけが 5 類となったところでした。この 2 年間、友の会会員の皆様も、徐々にコロナ前の生活を取り戻し、友の会の各種活動もコロナ以前の活動にほぼ戻ったのではないでしょうか。

博物館は、去る 2025 年 3 月 20 日、開館 30 周年を迎えました。当館が開館した 1995 年には、1 月 17 日に阪神淡路大震災、3 月 20 日に地下鉄サリン事件が発生したのが思い出されます。開館後も、地震や台風・大雨などによる災害だけでなく、通り魔や車の暴走による痛ましい事件・事故もありました。最近では、コロナウィルスの感染拡大が社会全体に影響を及ぼし、この 2 月から 3 月の岩手、愛媛、宮崎などの山林火災も記憶に新しいところです。

そんな 30 年間ですが、皆様には、さまざまな友の会活動に参画、参加されることに、自らが楽しんで頂けていたでしょうか。博物館はそれらの活動に寄り添い、良きパートナーとして、皆様のご期待に応えることができていたでしょうか。友の会の発足は、博物館に遅れること 2 年、1997 年 4 月ですので、再来年が発足 30 周年になるかと思います。博物館の開館 30 周年は、30 周年記念特別展「生命の星・地球博物館の 30 年―120 万点から厳選した資料で振り返る―」を開催し、「自然科学のとびら」（Vol.31, No.31）の巻頭を記念の記事で飾りました。友の会の 30 周年、どんな年になるのでしょうか。友の会の一会員としても、今から楽しみです。

30 年はひとつの区切りでありますが、当館は、引き続き、「集める」「調べる」「伝える」の博物館の基本的活動を充実させ、10 年、50 年、100 年先へと活動を続けて行きます。友の会のみなさまも、そんな博物館の活動に寄り添い、応援いただき、自らが楽しみつつ、ともに歩んでいただければと思いますので、よろしくお願いします。

事務部より

2025 年度第 29 回友の会総会の開催

2025 年 4 月 26 日 12 時 30 分より、博物館講義室にて第 29 回友の会総会が開催されました。

会長挨拶では、昨年度の活動への感謝と共に、友の会の課題として「講座のマンネリ化」「会員数の減少」「運営体制の硬直化」が挙げられました。今年度はこれらの課題解決に注力する方針が示されました。

議事審議に入り、まず 2024 年度の事業報告（博物館との共催事業、事務局・広報活動、講座実施状況）と決算報告が行われ、いずれも質疑応答の後、拍手多数で承認されました。決算は若干の黒字となりました。

次に 2025 年度の新役員体制案が提示され、新任・退任役員の紹介の後、拍手多数で承認されました。役員の高齢化や人員不足（特に会計、監査、広報）が課題として挙がり、協力者が募集されました。

また、2025 年度の事業計画案（共催事業継続、友の会のあり方検討、情報発信継続、新規講座企画）と予算案（会員拡充目標、講座講師への補助増額、物価高騰を反映した広報費増額等）が提案され、質疑応答の後、いずれも拍手多数で承認されました。

最後の質疑応答では、活動グループへの入会方法や、個人でも講座を立ち上げられるかといった質問が出され、積極的な参加と提案が歓迎される旨が確認されました。また、これらの情報について、より分かりやすい広報を求める意見がありました。

今回の総会では、現状の課題認識を共有しつつ、次年度に向けた計画と体制が承認されました。特に会員参加の促進や運営体制の活性化が今後の重要なテーマであることが共有されました。

総会の様子（役員紹介）

2025 年度第1回友の会役員会の開催

2025年4月19日（土）、友の会役員会がZoomにて開催されました（発送作業が無いときはオンラインで実施しています）。主な議題は、4月26日に迫った総会の最終準備です 。

内容としては総会で皆さんに諮る議案書の内容や、役割分担の最終確認です。

前回と変わったこととしては、講座企画費を一律1,000円増額することです。これは、講座運営には交通費などの自己負担が大きいという実情を踏まえ、今後の活動活性化を目的とするものです。また総会後の自然観察会は、雨天の場合でも中止とせず、講師による屋内での講演会を実施する方針を確認しました。その他、議案書の文言修正などを行い、総会に向けた準備を整えました。

2025 年度第 2 回友の会役員会の開催

2025年5月10日（土）に友の会役員会がZoomで開催されました。

まず、会員数が現在303名（目標360名）であること、および発送費などの現時点の会計状況が報告されました。

主要な議題は、先日行われた総会・イベントの振り返りです。総会（参加22名）では、活動への参加方法や広報強化に関する質疑応答があり、内容はブログで公開予定。自然観察会（参加46名）では、駐車場利用や参加者誘導における課題が指摘されました。懇親会（参加22名）については、来年度の会場や参加費のあり方が検討されました。

今後の日程については、2025年度の役員会日程を確認。今年度総会が土曜開催で参加者が少なかった反省から、2026年度の総会は4月26日(日)を候補に検討を進めることが決まりました。

その他、会員とのコミュニケーション不足や博物館HPからの導線の分かりにくさといった広報面の課題、講座のマンネリ化を防ぐための新規企画募集などが議論されました。また博物館からは、燻蒸期間の休館や特別展の日程について連絡がありました。

次回は 7 月 5 日（土）です。発送作業もあり、博物館での開催となります。

活動報告（植物グループ）

◆植物観察会「冬の雑木林を歩く」

2025年2月15日（土）／秦野市　頭高山（ずっこうやま）／20名（スタッフ含む）／講師：田中徳久当館館長／担当：植物グループ

小田急線渋沢駅9時10分に集合し、バスに乗り千村台で降りました。停留所から見える大磯丘陵等の景色の説明をして、すぐに出発です。センダンやメタセコイアの実を拾いながら、田んぼの土手道につくとすぐロゼット探しがはじまりました。ロゼットとは草の冬越しの姿の一種で冬の太陽をいっぱい浴びるためにバラの花のように葉を放射状に広げた状態を言います。ロゼットの姿から植物を同定するのですがこれがなかなか難しいのです。

ハルジオンのロゼット

それでも何とか、ハルジオン、タンポポ（もう花が咲きかけていました）ユウゲショウ、ナズナ、ウラジロチチコグサ、メマツヨイグサ等を見分けることができました。ホトケノザが可愛いピンクの花を咲かせていました。

雑木林に入る手前で担当者が冬の樹木の観察、同定のポイント（互生、対生、冬芽の種類等）を資料を基に説明をしました。森に入ると一見冬枯れで何もないようにみえるのですが、セントウソウ、ムラサキニガナ、キッコウハグマ、沢山のヤマルリソウ等の草が見られました。ヤマルリソウは鎌倉や横須賀方面ではあまり見られないとの事でこんなに沢山みられるのは羨ましいと言われました。

樹木も冬芽が美しい鱗芽のコクサギ、果穂もまだ残っていたクマシデ、紫緑色の木肌が特徴的なハナイカダ、落枝痕が特徴的なウワミズザクラ、短枝が目印のカマツカ、冬芽が隠れているバイカウツギ（隠芽）、葉がそのまま冬芽になっている裸芽のムラサキシキブ、実がいつまでも残っているウツギとマルバウツギの実の大きさと形の違いなどを皆さんとワイワイ言いながら観察しました。又ミツバウツギの種子のつややかさに驚いたりしている間に昼食場所につきました。

昼食後12時30分より田中先生から植物の冬越しの工夫や常緑樹にも立派な冬芽がある等のお話をしていただいた後、頂上目指して出発です。

かなりな急坂を登り、標高303mの頂上にたどり着きました。頂上からは丹沢の山並みや箱根の山並みがくっきり見えました。再び田中先生より秦野の雑木林の成り立ちや俗にいう渋沢丘陵はじつは大磯丘陵の一部をさす等のお話をしていただきました。

頂上より急な階段を降り、冬芽が真っ赤な水滴形のモミジイチゴ、すでに穂状の花芽が付いていたキブシ、大きな葉痕が特徴的なニワウルシ（シンジュ）、ホオノキの大きな冬芽と葉、雄花序が特徴的なツノハシバミ等を観察しながら元の昼食場所まで戻りました。

そこから途中までは同じ道を帰り、赤い鞘の残っているトキリマメ、もう咲いていたタチツボスミレを写真に撮りながら、観察終了場所の祈りの丘を目指しました。祈りの丘の少し手前で同じ秦野市でも丹沢周辺では見られなくて大磯丘陵の続きのこの辺りでは自生しているモクレイシを見ることができました。

帰り道でモクレイシの雄木と雌木に蕾がついているお宅がありました。

15時過ぎ渋沢駅に全員、無事到着。

吹く風と明るい日差しに春の到来を間近に感じた一日でした。（近田あき子）

雄花序が目を引くツノハシバミ

イタヤカエデの冬芽（鱗芽）

ムラサキシキブの冬芽（裸芽）

◆植物観察会「身近な植物観察入門」

2025 年 4 月 26 日（土）／博物館から吾性沢方面／16 名（スタッフ含む）／担当：植物グループ

今回の身近な植物観察入門に備え、オートバイによる広範囲且つ効率的な事前調査（それは手抜きです、と言われそうですが。）の結果、オオバウマノスズクサの花が咲いているのを発見したので、観察コースは迷うことなく吾性沢方面に決定。

たどり着く前に時間切れになってしまったらとても悲しいので、出来る限り道草せずに先を急ぐのだが、ジロボウエンゴサク、ヤブニンジン、ウラシマソウ等に次々と行く手を阻まれ、オオバウマノスズクサに出会えたのは観察会終了予定時間およそ 30 分前。自然が作り出す造形の不思議さを存分に味わった後、急ぎ帰途につく。

オオバウマノスズクサはこんな花です

時間が押し迫っているので急ぎますよと言った本人（私）が、カタバミで 10 円玉をピカピカにしてみたりと余計なことをしたこともあり、入生田駅にたどり着くかなり手前の路上で観察会終了となる。その後 1 人、駅・博物館方面の分岐に立ち、参加者が無事帰路につくのを見届けた後、“ 実も面白いんだったよね、オオバウマノスズクサ ”、とつぶやきながら友の会総会に参加すべく生命の星・地球博物館に急ぎ向かうのであった。（石井俊哉）

【植物グループの勉強会を田島が原で実施】

4 月 14 日にグループメンバーのスキルアップと今後の友の会植物観察会に備えて 埼玉県田島が原で勉強会を実施しました。

サクラソウ（サクラソウ科）

現地は荒川河川敷に広がる草原でサクラソウの自生地として大変有名で大勢の人が訪れます。また多くの方のボランティアによっても支えられている場所です。

サクラソウだけでなく神奈川県では見る機会の少ない湿地性の植物、ヒキノカサ、ノウルシ、トダスゲ などが咲いていました。ハンノキの大木も何本も有りました。残念ながらチョウジソウはまだ蕾でした。

サクラソウ祭りで混みあう直前に訪れゆっくりと勉強してきました。遠いのが難点ですが観察会に入れられたらと思っています。（小久保恭子）

ヒキノカサ（キンポウゲ科）

トダスゲ（カヤツリグサ科）

活動報告（よろずスタジオ）

◆「アンモナイトをなぞろう！」
2025年2月16日（日）／博物館講義室／57名（大人29名、子ども28名）／協力：田口学芸員／スタッフ：4名

今回のよろずスタジオは田口学芸員の協力のもと「アンモナイトをなぞろう」の実施となりました。「アンモナイト？なぞる？」どんなことをするんだろうと興味を持って参加された皆さん。ライトテーブルが置かれている席に着くとスタッフから活動内容の説明を受けます。最初にテーブル上に並べられた様々なアンモナイトの画像から好きなものを１枚選びます。それをライトテーブルに載せ、その上にコピー用紙を重ねたら準備完了です。紙に映ったアンモナイトを鉛筆で丁寧になぞっていくのが今日の作業で、描いたアンモナイトに色付けしたい人は色鉛筆やクレヨンなどで塗ることもできます。

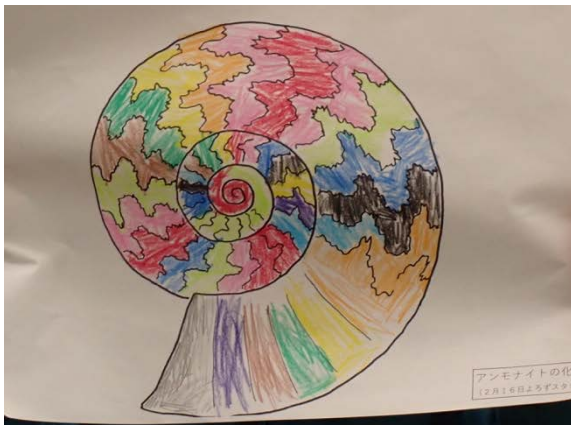
さあ説明を聞いたら作業開始です。ライトテーブルのスイッチを入れるとアンモナイトの画像がきれいに浮き出てくるので、その浮き出たアンモナイトの画像をゆっくりなぞっていきます。はじめに鉛筆で輪郭から描く人、表面の細かい模様から丁寧になぞっていく人、やり方は様々です。「ここはよく見えないな」とつぶやきながらはっきり見えない線をアンモナイトの画像を直接覗いて確認する人もいます。開始前からいらした大人の方は友の会通信の行事案内を見て参加されたとのこと、時間をかけて細かくまた丁寧に鉛筆を走らせ色付までされていました。

会場には予め下絵が描かれたアンモナイトの用紙も用意され、アンモナイトの色塗りを楽しんでいました。細部まで鉛筆のみで仕上げたアンモナイト、カラフルな色が付いたアンモナイト、皆それぞれ自分だけのアンモナイトを完成させ満足げでした。「アンモナイトってどこに行けば見られるの？」という質問に「今は化石でしか見られないんだよ、アンモナイトは巻貝の仲間ではなく、イカやタコに近い仲間だよ」と答えてくださいました。参加者の皆さんが真剣に集中し取り組んでいる姿を嬉しそうに見て回られる田口学芸員の姿が印象的でした。
（佐々木あや子）

会場風景

集中して鉛筆を動かして・・・

丁寧に細かく描き完成です


アンモナイトの色塗りを楽しみました

◆「動物の手と足クイズ」

2025 年 4 月 6 日（日）／博物館講義室／54 名（大人 32 名、子ども 22 名）／協力学芸員：大島学芸員／担当：友の会スタッフ 4 名

二年振りの大島学芸員の登場、新考案・新作のプログラムを実施しました。

動物は歩いたり、走ったり、穴を掘ったり、えさをつかまえたりして生活しますが、その役を担っている足と手に注目するもので、参加してくださった方々に新しい視野を提供する機会になりました。

プログラムはスライドを使って進行し、参加者自らの手と足を紙に写し取る作業から始まります。この作業を通じ、参加者は手と足の学びに引き込まれて行く様子が見て取れました。その後、手のひらと足の裏の長さ、幅を計測し、次いで形、指の向き、皮膚の様子、関節の数、関節の動き、爪の形などと観察を進め、動物の手足の写真で、持ち主の動物を当てるクイズへと続きます。

当たり前に思っている手足の形も機能も、改めて観察すると新鮮ですし、動物のそれと比較することで、知識も深まります。毎回の事ですが今回も、子供ばかりでなく、同行の親御さんにも新しい気づきがあり、プログラムを楽しんでくださいました。

クイズに登場した動物は、チンパンジー（手も足も親指の向きは同じ）、ヒグマ（5 本の指と尖った細い爪）、アリクイ（長い 2 本の爪）、キリン（2 つの指と硬い爪）、カンガルー（足と手の形が大きく違う、足の裏は跳べるように長く平たい）、アシカ（ヒレのような大きな手）、アザラシ（5 本の指の名残りと細い爪）、オオカミ（4 本の指、出たままの爪）でした。展示されていない動物のウマ、ウシ、ヌー、イノシシ、ブタの足の標本を展示して、見てもらいました。

最後に、「展示室にある動物の剥製の顔ではなく、手足に注目してみてください」と声がけして、プログラムは締めくくられました。30 分毎の入れ替え制で行いましたので、落ち着いた雰囲気で集中度の高いワークショップになりました。一人で 4 回全部の解説・進行をしてくださった大島学芸員の熱い支援に感謝します。（赤堀千里）

自分の手足の大きさを計る

どれどれ、足を置いてみて

自分の手足の型取りに注目

当日並べられたウマ、イノシシなどの足の標本

活動報告（地学グループ）

◆地話懇話会

「友の会発足時から今までの講座を振り返る」

2025 年 3 月 26 日（水）／博物館西講義室／16 名／講師：山下学芸員

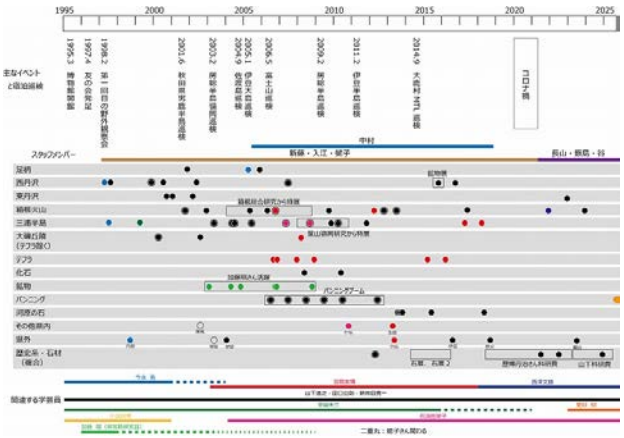
講師の山下浩之　氏

今回の地話懇話会は地球博 30 周年を記念して今まで地学グループで行なった野外活動の紹介がありました。

地学グループがそもそも発足したのは、博物館の講座に申込んでも落選することが多く、それでは自分たちで企画すればよいのではというのが発端だそうで、おかげで今の私たちはいろいろな活動に参加でき、感謝に堪えません。

1998/2/21 に第一回観察会を山北町皆瀬川で実施し、それから 27 年間、91 回にわたる野外活動を行なってきました。

野外活動を担当したスタッフメンバー・学芸員別に色分けした年表のスライドを見ると、ＹさんＴさんは丹沢・箱根方面が好きだね、三浦半島といえばＥさんだね、パンニングブームもあったね、など 27 年間の活動が一目瞭然でした。この中から本日の参加者のリクエストに応じて、12 件の野外活動の思い出話をしていただきました。



資料提供された野外活動の歴史年表

経ヶ岳、大鹿村、佐渡、足柄層柱状図作り、中世鎌倉、甲府、鳥瞰図湯河原、伊豆大島、早春の伊豆、河原の石、河原での岩石薄片作り、パンニングです。

二つのスクリーンを駆使して思い出話を

この中で私が興味を持った活動を紹介しますと、佐渡（2004/9/3　1 泊 4 日の旅）佐渡までの往復は青春 18 きっぷで夜行列車を使い、佐渡初日は枕状溶岩の破砕・トンネル、ピクライト（かんらん石を含む岩石）、有孔虫の露頭見学、夜は宴会、そのあと勉強会（携帯ＯＨＰ持込）、翌日は佐渡金山、玄武岩の丘の見学、山下さんの話しぶりからも伺えましたが宿泊の野外活動はとにかく面白そうでした。

河原での岩石薄片作り（2018/4/28）では石をひとわたり観察したあと、これはと思った石を薄く削ぐ、紙やすりでひたすら磨き、平らになったところでガラス片に熱を加えながらバルサムで接着、さらに紙やすりで磨き、完成した薄片をポータブル偏光顕微鏡で観察、機材運びは大変でしたが充実の活動だったそうです。

携帯用 OHP を持ち込んで宿での勉強会（甲府特別巡検）

最後に本日のお話をもとに、アンケートへ各人思い思いに行きたい場所や、やりたい事を記入しました。今回の地話懇話会から地学グループの新たな企画が生まれることを願っています。（加藤敏夫）

活動報告（総会イベント）

◆植物コース
2025 年 4 月 26 日（土）／博物館～早川沿い～風祭～桜沢～水之尾～城山公園～小田原駅／21 名／大西亘学芸員

まずは博物館の前庭から周りの山を眺めてみましょう、と大西学芸員の言葉。初めは漠然と緑一色に見えていた山がじっくり眺めていくと多彩な緑の山に変化する。木の種類、光の具合、場所などにより色が変化するそうだ。遠くから見て色や枝ぶりなどで木の名前を考えてみるのも楽しい、との説明もあった。この時期、燃えるような黄色や薄黄色、くすんだ赤、と言葉では表せないくらいたくさんの芽出しの色が山を彩る。そういえば日本には多くの素敵な色の名前があったっけ、と思いだす。浅緑、萌黄色、若竹色、浅黄色、青丹等々。

早川沿いの道を山肌に咲く紫色のフジや白いミズキの花を眺めながら進む。河畔にはヤナギの仲間やニセアカシアの白い花など落葉樹が、また川べりには、外来種のオオカワヂシャなどが咲いている。

風祭のかまぼこの里へ到着する。しばらく急な登りがあるが見せたい植物もたくさんあります、と大西学芸員。やがて 1 本のウメの大木が現れる。あまりに大きく実の収穫は大変そう、と所有者でもないのに心配する。タブノキの混芽は大きく太っちょで冬の間に中に葉と花をセットしてあり、それが今は花を咲かせている。シロダモの新葉は柔らかい白い絹毛を密につけていて触るとビロードのような肌触り。シロダモには嫌がられそうだが何回も触りたくなる。この美しい毛は虫よけか寒さ対策か？新葉の白さは遠目には花のように見える。アケビの花やマルバウツギも咲いている。入生田付近ではあまり見かけないヤブレガサも出てくる。

急坂を登りきったところで一休みする。大きなオニグルミの木が何本もある。ラッキーなことに今日は雄花、雌花の両方が見られた。雄花は葉腋に 15 ㎝くらいの長い雄花序を作り垂れ下がり、雌花は枝先に上向きの雌花序を作り赤くはっきりと見える。ハゼノキとオニグルミも慣れれば枝の出方、葉の付き方などでわかるようになるとのこと。オニグルミの葉は複葉でどこからどこまでを 1 枚の葉というかというお話も伺う。水之尾への道は景色がよく、1 時間半ほど前に出発した博物館がはるか下の方の早川沿いにおもちゃの様にみえる。登った！というちょっとした達成感を皆さん味わったと思う。

その後車道から離れて細い尾根道を丹沢方面の山々や大磯丘陵を見ながら城山公園へと進む。クスノキなど大木も多くさすが山城の跡だけに堀切も残っており歴史を感じさせる。最後に急な 100 段の階段を降りると小田原駅はすぐ目の前。楽しい 2 時間半はあっという間に終わり、16 時 30 分、解散となった。植物観察というと植物の細かい部分に目が行きがちだが植物を環境の一部として見る楽しさを感じることのできる観察会で大変有益だった。（小久保恭子）

シロダモの新しい葉は柔らかい毛に覆われる

矢印の所がオニグルミの雌花　わかるかな？

城山公園で大西学芸員の説明を聞く

◆地学コース

2025年4月26日（土）／博物館～風祭八幡神社～風祭石採石場跡～明星ヶ岳溶岩露頭～博物館／14名／西澤文勝学芸員（夏目学芸員がサポートとして同行）

観察会の出発前に、室内にて今回の講師をして頂く西澤学芸員より、資料に基づき本日のコースで観察する地質、地形の概要について剥ぎ取り標本も使って説明があった。

本日の目玉は「風祭石（かざまつりいし）」！　博物館を出発し直ぐ、国道を跨ぐ陸橋上で早川を挟んだ両岸の地形とその成立ちについて説明があった。その後、入生田駅入口から風祭公民館を通り観察地点①の「風祭八幡神社」に到着。ここで「風祭石」の説明があり、この神社境内で「風祭石」と「根府川石」、「溶岩」を各自で探す10分間トライアルがあった。

風祭神社での石探し

結果、この3つの石の内、溶岩以外は探すことが出来ませんでした。

「風祭石」は6.6万年前の箱根火山最大の爆発的噴火で発生した火砕流堆積物からなる「溶結凝灰岩」で、これにより風祭だけでなく広くの地域も覆われたが、現在は入生田から風祭の早川左岸側によく見られる。この石は比較的柔らかく、火に強いことから石祠やかまどに使用され、小田原城にも使われた。

神社境内にあった風祭石の祠

神社境内ではその他「根府川石の石碑」や「富士溶岩の大きな置物」が見られた。根府川石は安山岩の一種で硬く板状節理があり石碑や飛び石などの石材として使用されている。

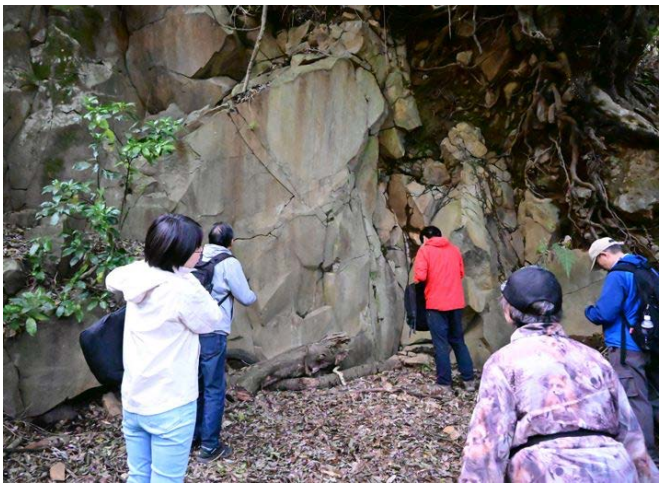
次に風祭神社を出て、観察地点②の「風祭石採石場跡」に向かう。採石場跡までの道のりはかなりの上り（標高差40m）となり、跡地には薮こぎをして到着。写真にありますように山肌を削り採石したため、現在は垂直の岩肌が残されています。

風祭石の採石場跡

風祭石は比較的柔らかいため、採石は容易であったと思われるが、山の中腹から下の集落までの運搬が大変であったのではないだろうか。

採石場跡を出て、最後の観察地点③の「溶岩露頭」に向かう。さらに急坂を上り（標高差２０m）溶岩露頭に到着。

この溶岩は30万年前に流れ出した「明星ヶ岳溶岩」で、かなり硬質。この辺りでは古い溶岩であるため、このあと何度も噴火や火砕流で覆われて一部が窓のように残り、露頭となった。


明星ヶ岳溶岩の露頭

以上、本日の観察地点を予定通り終えたので、下山し帰路に着いた。

途中の風祭駅近くで、夏目学芸員より6月20日に博物館で開催される「地話懇話会特別バージョン（高知コアセンターとのLive中継）」の紹介があった。今日は、博物館からすぐ近くの場所で箱根火山の噴火の歴史の一端を知ることができ本当に勉強になりました。

最後に西澤学芸員、夏目学芸員、地学グループ長山さんに感謝申し上げます。

（文　北浦明三、写真提供　長山武夫）

◆動物コース
2025年4月26日（土）／小田原市長興山
／12名（講師含む）／鈴木学芸員

今回の動物（哺乳類）コースは鈴木学芸員が講師です。博物館の前庭には動物の足跡が石造物で展示してあります。さっそくどの動物の足跡なのか、観察が始まりました。鈴木さんから配布された資料と照らし合わせながら、タヌキ、ニホンザル、イヌ、キツネ、シカ、イノシシ、ゾウ、ツキノワグマ、ハクビシンなどの足跡を、皆さんで言い当てたりしました。けっこうむずかしいもので、ふだんの観察力がない私にはハードルが高いようでした。

歩道橋をわたり、登山電車のガードをくぐり旧東海道を進み、長興山紹太寺の入り口に来ました。いよいよフィールドワークの始まりです。まずは稲葉一族の墓所を目指します。長興山紹太寺は小田原藩主だった稲葉一族の菩提寺で広大な寺院でしたが、幕末に焼けてしまいました。しかし300段の石段や石橋、墓石は残っています。石段の途中でさっそくイノシシの足跡、モグラのトンネルがありました。モグラは石畳に沿ってトンネルを掘る習性があるとのこと。モグラは他の動物にほとんど食べられることはないそうで、鈴木さんいわく、まずいので食べられることはないのではと。いっぽうネズミは旨いそうで、他の動物によく狙われるそうです。ちなみにわれわれヒトは、許可がなければ野生動物捕獲禁止です。鈴木さんは研究のため、毎年捕獲の許可申請をしているそうです。

近くにクルミの木がありました。ニホンリスでしょうか、食べたあとがありました。リスはじょうずにクルミを割って食べるそうです。御霊堂あとの階段に来ました。階段途中にカニの甲羅や足がちらばっていました。サワガニがなにかの動物に食べられたようです。素人考えで、カニを食べるのはサルではとないかと言ってしまいました。長興山一帯にいたサルはすべて捕獲され今はいないそうで、サルではないようです。焼けた伽藍あとは現在畑になっていてイノシシやシカの出没地帯で、被害があるようです。畑の中にはイノシシの捕獲用のワナがありました。このあたりはタヌキやハクビシンも生息しているそうです。

沢にやってきました。山が深いので水量があります。鈴木さん、石の上に動物の毛が密集しているのを見つけました。何の野生動物の毛かわからないので、ピンセットで採取しシャーレに入れました。博物館に持って帰って鑑定するそうです。なぜ、毛が密集して

動物の毛を採取

残っているのか、食べられた跡なのか、食べられて毛が消化されずに糞として残ったのか、わからないとのこと。この毛、ただ歩いているだけでは見過ごしてしまうもので、鈴木さんの観察眼に恐れ入りました。

有名なしだれ桜を俯瞰するところに出て来ました。桜の木はすでに青々としています。ここから坂を上りました。イノシシの足跡や通ったあとのけもの道が目立ちます。竹藪があります。タケノコがあちこちに頭を出しています。イノシシはタケノコを食べにくるそうですので、足跡や通り道があるわけです。またまた鈴木さん何かを見つけました。糞です。何の動物の糞なのかわからないので、またまたピンセットとシャーレの出番です。動物が糞をしていくのはマーキングをしていくことが多いそうです。逆にヒトからすると、マーキングに定期的にくるならば、ワナを仕掛ける場所に最適とのこと。こんなところに野生動物とヒトとのかけ引きがあるようです。けっこう登ってきました。まわりは耕作放棄の農地ばかりです。野生動物のパラダイスのようです。

栗の木の下で糞を発見

さいごに栗林に来ました。ここも耕作放棄地です。まわりはシカが若葉を食べたあとが点々とあります。栗の木の下は食べ物が豊富なのでたくさんの野生動物が集まってきます。その痕跡を探します。ありました、ありました。シカ、イノシシなどの糞があちこちにあります。参加者の幼稚園児のお子さんがイノシシの新しそうな糞を見つけました。さっそく鈴木さん、ピンセットで採集です。糞は新しければ新しいほど、研究対象になるそうです。とはいうものの新鮮な糞にはなかなか遭遇しないようです。たくさん野生動物が集まるポイントなので、近くにはくくりワナが仕掛けてありました。ワナの存在を知らせるプレートが下がっていました。山に入ったときには要注意です。

長興山をフィールドとした野生動物の観察会でしたが、意外にたくさんの動物の痕跡を見ることができました。参加者の皆さん、満足されたようです。野生動物の生態を熟知している鈴木さんと問答しながらゆっくり歩く、痕跡が見つかる、解説を聞く、会話が弾む、これが楽しいのです。参加された皆さん、おつかれさまでした。鈴木さん、ありがとうございました。
（関口康弘）

情報クリップ

友の会会員数：302名（５月20日時点）
正会員：299名／賛助会員：３名

●博物館人事異動

2025年４月１日付

<学芸部>

異　　動：西澤 文勝（地学担当／
　　前・企画普及課兼務）
　　石田 祐子（植物担当／
　　前・情報資料課兼務）

<管理課>

転　　入：吉村 光太郎
新規採用：竹前 佳世子
　　太田 孝

<企画情報部 企画普及課>

異　　動：新井田 秀一（学芸部兼務 地学担当）
新規採用：八幡 珠恵
転　　出：中村 友美子

<企画情報部 情報資料課>

異　　動：西村 双葉（学芸部兼務 動物担当）
転　　入：堀 涼太
転　　出：平澤 恭子

<学習指導員>

新規採用：大谷 一

2025年５月１日付

<ライブラリー>

新規採用：甫仮 久美子（司書）

●退職

2025年３月31日付

内田 茂　（前・管理課）
森泉 誠司（前・学習指導員）

2025年４月30日付

望月 千奈（前・司書）

●2025年度 友の会担当職員のご紹介

山下 浩之、苅部 治紀、夏目 樹、本杉 弥生

行事案内

◆ 地話懇話会「植物の化石化過程」

話題提供者：山川隆良氏
　　（箱根ジオミュージアム学芸員）
日　時： 2025 年 8 月 27 日（水）14:00～15:30
　　受付は 13:40 から
場　所：博物館１階　西側講義室
対　象：友の会会員を原則とする。
申込み：当日受付制（人数制限は設けません）
参加費：無料
備　考：マスクの着用については、個人の判断にてお願いいたします。

内容紹介

植物が化石として残る過程には、土砂の移動や火山の噴火、熱水の沈殿など、さまざまな自然現象が関わっています。木の組織の隙間を鉱物が埋めてできた珪化木、岩屑なだれによって埋もれた木、温泉の沈殿物に刻まれた葉の化石、植物が長い時間をかけて炭化した石炭、さらには溶岩に焼きついた木の痕跡など、箱根周辺をはじめとする各地の事例を通して、多様なプロセスで形成された植物の化石を紹介します。

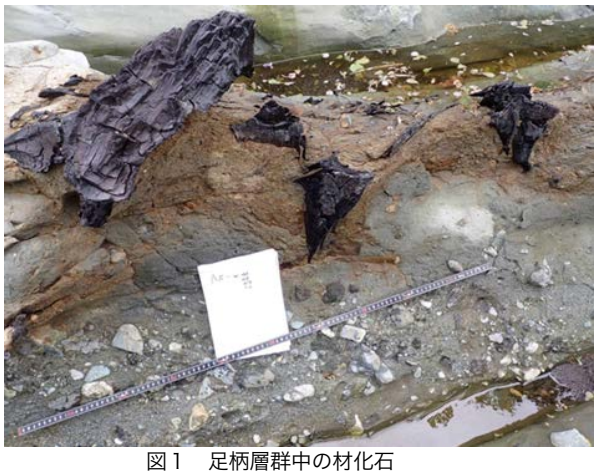


図１　足柄層群中の材化石

図２　富士山岩屑なだれ堆積物中の埋没材

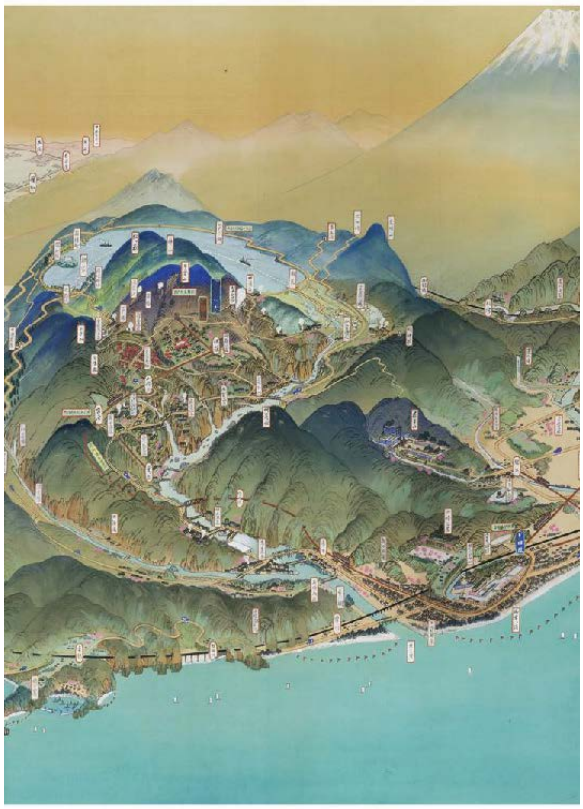
◆ よろずスタジオ「葉っぱであそぼう」

これは何の葉っぱかな？葉っぱクイズをして
名前が分かったら葉っぱスタンプを楽しもう！

日　時：9 月 7 日（日）　13:00～15:00
場　所：博物館 1 階　東側講義室
対　象：子ども（当日の来館者）
申込み：不要／オープン
参加費：無料

◆ 第 144 回　サロン・ド・小田原のご案内「鳥瞰図や地図を楽しむ。特別展『初三郎式、かながわの描き方』より」

話題提供者：新井田秀一　氏（当館学芸員）
日　時：2025 年 9 月 13 日（土）　14:00~15:30
受付は 13:40 から
場　所：博物館 1 階　西側講義室
定　員：45 名。先着順　事前申込みはありません
オープンで一般も可。
参加費：無料



「神奈川県鳥瞰図」（吉田初三郎・作、歴博所蔵）
1932（昭和 7）年より、小田原・箱根拡大

内容紹介
開催中の特別展に関連して、吉田初三郎・作「神奈川県鳥瞰図」など絵地図や、大日本帝国陸地測量部の作成した明治から昭和初期の地図などを使って、その楽しみ方を紹介します。

◆ 「神奈川県農業技術センター」見学会

私達が生きて行く上で欠かせない食物、それを作り出す農業は何よりも大切な分野です。
それなのに、県民でその存在を知っている人は少ないと思われる、県の農業技術センターを見学できることになりました。「どんな所にあって、どんな役目を担っているのか」、実際にご自分の目で確かめてみませんか。

神奈川県農業技術センター

日　時：9 月 24 日（水）　10：00～12：00
（雨天実施、バス運休時は中止）
集　合：　平塚駅北口　1 番バス乗り場　8：50
バスは 9：05 発　神奈川大学経由秦野行
遅れると 2 時間ありませんので、ご注意ください。
バス停「吉浜」で降車、徒歩 5 分（乗車時間約 30 分）
農業技術センター所在地：平塚市上吉沢 1617
解　散：平塚駅北口
吉浜バス停 13：04 発のバスに乗ります。
持ち物：お弁当、飲み物（所内に自動販売機あり）
見学後会議室で食べます。
対　象：友の会会員
参加費：100 円　　別途バス代、往復約　900 円
申込み：友の会 WEB フォームで 8月31日(日)まで
定　員：20 人、　応募多数の場合、抽選
主　催：友の会菌事勉強会
問合せ：080-1088-9269 赤堀千里

◆　植物観察会　『身近な植物観察入門』

植物グループのスタッフと、博物館周辺の身近な植物を観察する、初心者中心の気楽で楽しい会です。
会員以外の方も大歓迎です。

日　時：9 月 27 日（土）・10 月 25 日（土）
　　連続して出る必要はありません
集　合：博物館正面　前庭　10：00
解　散：同所　12:00 頃
参加費：50 円（保険料）
講　師：友の会植物グループ
対　象：オープン・どなたでも
　　小学 3 年生以下は保護者同伴でお願いします
持ち物：飲み物・雨具など
　（お持ちの方は虫メガネ・ルーペ等の拡大鏡）
申込み：友の会の WEB フォームで
申し込み開始は友の会通信到着後から
　　締め切りは下記電話の場合と同じ

メールを使わない方は各月担当者へ電話で
　　下記の申込期間内の 18:00～21:00
・9 /27 観察会：佐々木 080-5686 - 6762
　　申込期間：9 /22（月）～ 9/24（水）
・10/25 観察会：山田　080-3394-5101
　　申込期間：10/20（月）～10/22（水）

問合せ：上記の電話申込担当者へ 18：00～21：00
　（博物館には問い合わせないで下さい）
　雨天等で中止の場合は、申し込んだ方に担当者から電話またはメールで連絡いたします。

2024 年 9 月観察会より　カラスノゴマ

友の会主催行事の参加申込みについて

◆行事案内に申込み方法が指定されていない場合、往復はがきに必要事項を記入して、友の会事務局までお送りください。
■必事事項：行事名／開催日／参加者全員の氏名・年齢（学年）／会員番号／代表者の住所・電話番号／指定事項
◆行事案内に申込み方法が指定されている場合は指定された方法（メール・電話等）にてお申し込みください。
◆現在、一部の講座で WEB フォームによる申込受付を行っています。以下の QR コード又は URL よりアクセスして、申込をしてください。
◆WEB フォームによる申込は、下記 QR コードまたは URL からお願いします。
URL：https://forms.gle/q2u4VAuVp7r8cc4y7

注意！
■参加費は友の会会員 1 名分の金額で、内訳は資料代、傷害保険料です。それ以外のものは特記事項に記載があります。
■オープンの行事は会員以外の方も参加できます（参加費が会員とは異なる場合があります）。
■小学生以下の参加は保護者同伴が原則です。
■チラシの発行されない行事もありますので、直接＜連絡先＞へお問い合わせください。
■持ち物など詳細はメール・返信はがきに記載されます。

次号は、2025 年 9 月 15 日発行予定です。

発行：神奈川県立生命の星・地球博物館友の会
　　Vol.29、No.1、通巻 128 号 2025.6.15 発行
編集：友の会広報部
〒250-0031　神奈川県小田原市入生田４９９
TEL：0465-21-1515　FAX：0465-23-8846
E-mail：kpmtomo@ybb.ne.jp
Blog：http://blog.livedoor.jp/kpmtomo
Twitter：@kpmtomo